

幼児の心的飽和に関する実験的研究(Ⅲ)

○ 島田俊秀 高橋知子 近藤貞子
(東京家政大学) (慶応病院小児精神衛生相談室)(東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園)

目的： 本報告は塗色作業続行場面にみられる心的飽和の時間的推移の過程における作業内容の分析を目的とする。すなわち、飽和の推移によって、塗色に用いる色彩の種類がどのような変化をするか。また、これらの変化は幼児の性格類型の相異によって特徴がみられるか否かについて分析的検討を試みた。

方法： 本実験は次の3実験からなっており各々の目的方法結果は次のとおりである。

〔実験Ⅰ〕

目的—幼児は日常生活において、いかなる色彩を好んで使用するか。また、これらの現象は幼児の性格の相異によって異なるか否かについて確認する。方法—研究(Ⅱ)および実験Ⅱにおいて用いた被験者について、日常生活しているクレパスの長さを測定し、研究(Ⅱ)で用いた色彩の種類について、最短のものを1とし、最長のを7とし大きさの順に順位をつけた。結果—結果は表7に示す。表7

表7 日常使用される色彩の順位と各性格類型間の相関

色彩 類型	赤	橙	黄	緑	青	黒	灰	類型間の相関
E	2	6	7	4	5	1	3	0.64
I	1	7	5	4	3	2	6	
M	4	7	6	3	2	1	5	

は各被験者が使用しているクレパスの長さの測定の結果、最低のものを使用頻度の多いものとみなし、その平均順位を各類型別に示したものである。各類型間の相関関係は、列位差法で求めたものである。

〔実験Ⅱ〕

目的—塗色に用いた8種の色彩の好嫌に関して調査し、色彩の好嫌は性格の相異によって特徴がみられるか否かについて確認する。

方法—実験Ⅲで用いる8種の色彩を、1辺10cmの正方形の白紙に塗る。実験者はこの8種

の正方形を机上に無差別に配置し、被験者に「ここに8つの色を塗った紙があります。この中で1番好きな色はどれですか」と教示を与えて1枚選ばせ、それを1位とする。次に「こんどは7枚残りました。この中から1番好きな色を1枚選んでごらん下さい」と教示を与え、それを2位とする。以下同様に8位まで順位をつける。このような手続を2回繰り返かえし、その平均を求めて各人の好嫌の平均順位とした。結果—実験結果は表8に示す。表8は各被験者の好嫌順位を各類型別に平均を求めて表示したものである。

表8 色彩の好嫌の順位

色彩 類型	赤	橙	黄	緑	青	水	黒	灰	類型間の相関
E	4	6	1	4	2	2	7	8	0.82
I	6	5	1	3	1	4	8	7	
M	8	5	1	4	2	2	6	7	

〔実験Ⅲ〕

目的—研究Ⅱで報告した課題を用いて塗色作業と続行した場合、作業開始から作業放棄までの期間に、どの色彩の使用頻度が最も多いか、また飽和の推移によって色彩の使用頻度にどのような変動がみられるかを検討する。方法—実験方法は研究(Ⅲ)と全く同じである。

特にこの実験結果の分析に関連して強調した点は、次の3点である。(1)塗色に用いた8色は、12色のクレパスの中から選択したもので、被験者毎に新品を用いる。(2)クレパスは作業開始前に机上に無差別に配置しておく。(3)教示にあたっては、小三角形とかならず1色で塗りつぶすこと、同じ色彩を何度使用してもよいから自分で好きなように塗ることなどについて強調した。結果—結果は表9に示した。表9は全作業中(5-E)および各位相における各色彩の使用頻度の順位と示したもの

である。

表9 全作業中および各位相における色彩の使用順位

類型 色彩	E					I					M				
	S	A	B	C	S	S	A	B	C	S	S	A	B	C	S
赤	1	5	5	7	3	4	1	1	1	1	6	1	1	5	1
橙	4	3	2	2	2	1	2	7	8	3	1	4	2	1	3
黄	5	2	4	4	1	5	4	5	4	6	5	2	4	4	2
緑	6	1	3	3	6	2	3	6	2	4	8	5	2	6	8
水	3	8	6	5	5	8	7	2	7	2	3	8	4	3	5
青	2	4	8	1	4	3	5	3	3	7	2	6	3	7	4
黒	8	7	7	6	8	7	6	3	4	5	7	7	7	7	7
灰	7	6	1	8	7	6	8	8	4	8	3	3	6	2	6

結果: 3実験の各結果については上述してきたが各実験間の相関々係については表10, 表11に示す。表10は日常使用される色彩の順位(実験I)と順位法による好嫌順位(実験II, この場合実験Iと種類を統一するため灰色は除外した順位)との相関々係を列位差法によって求めたものである。表11は、各実験結果間および各位相間の相関々係

実験I: 実験II	相関々係
E: E	-0.59
I: I	-0.17
M: M	0.11

表11 各実験各位相全作業間の諸相関

類型 実験別	飽和位相	相関々係				
		S-A	A-B	B-C	C-E	S-E
E	実験I	-0.32	-0.75	-0.16	-0.61	-0.76
	実験II	0.57	0.24	-0.42	0.45	0.63
	位相	0.02	0.36	-0.24		
I	実験I	-0.36	0.28	0.59	0.52	0.50
	実験II	-0.15	0.09	0.08	0.09	0.17
	位相	0.79	-0.08	0.32		
M	実験I	-0.58	-0.64	-0.58	-0.71	-0.54
	実験II	0.20	-0.44	-0.13	-0.15	0.04
	位相	-0.05	0.41	0.15		

を示したもので、これらから次の事がいえる。

- (1) 幼児の色彩の使用頻度や好嫌には性格類型による顕著な相異は認められない。(表7, 8)
- (2) 幼児は、一般に明るい黄・水・緑・青などの色彩を好み、黒・灰・赤・橙などの色彩

には好まない。E型の幼児は、これらの結果とは逆相関の関係にあって、日常は黒・灰・赤などをよく用い、他の2型では一定の傾向はみられない。(表10)

(3) I型では、日常よく使用される色彩と全作業中に用いられた色彩との間には正の相関関係があるが、E, M型では負の相関々係にある。(表11)

(4) E型の幼児は、全作業中に好きな色彩を多く用いる。特にS-A位相において、その傾向は強く、飽和位相においては崩壊し、過飽和位相になると再び好きな色彩を用いるようになる。(表11)

(5) E, M型ではS-A位相からA-B位相にかけて色彩の使用度の変動し、A-B, B-C位相では一定の傾向を示し、さらにC-E位相にかけて変動する。I型では、S-A位相からA-B位相にかけて類似した傾向を示しB-C位相以後になると、その体制は変動する。

結論: 研究(III)および研究(IV)より次のような結論が得られる。

- (1) 幼児は、外罰・内罰・無罰の3類型のいずれの性格であっても、心的飽和に達するまでの時間は一定である。
- (2) 内罰・無罰型の幼児には顕著な特徴はみられないが、外罰型の幼児は、飽和位相に達すると作業には不必要な介在行動が多くなり、また、介在行動が表面化する以前に他の2類型よりも早く作業の質的面に現われる。
- (3) 外罰型の幼児は、一般に好きな色彩を用いて作業を進めるが、他の2型に比べ、飽和位相の推移に伴い用いる色彩の種類が多くなる。

ようするに、幼児の無限定課題作業場面における飽和過程には、幼児の人格的要因が大きく影響する。

* この研究にあたっては、お茶の水女子大学松村康平先生、本大学附属みどり幼稚園園長川崎棟先生に多大の御指導を戴きました。ここに厚く謝意を表します。